



また新たなステージへ

校長 地主桂子

荒砥高等学校同窓会の皆様には、本校の教育活動に對しまして日頃、多大なるご理解とご協力を賜りまして心から感謝申し上げます。

今年度、本校は創立74周年を迎え、全ての年次が一学級の小規模校として新たな歩みを始めました。新型コロナウイルスの感染対策を施しながらの学校運営はいまだに続いていますが、生徒の活躍の場を一つでも多く創出しようと、今年も白鷹町をはじめ地域の皆様、後援会や保護者の皆様からのご支援をいただきながら、教育活動の一層の充実を目指して取り組んで参りました。

日ごろの学習はもとより、資格取得や部活動の各種大会・コンクールでの成果など、生徒が各自の目ざすところに向かって熱心に取り組みました。スポーツ祭、荒高祭、クラスマッチの荒高三大行事は、生徒会を中心に工夫を凝らして大成功を収め、今年は保護者

近況報告

齋藤 天音（平成三十年度卒業・東北芸術工科大学在学）

私は平成三十年度に荒砥高校を卒業しました。友人に誘われ高校から吹奏楽部に入学し、3年間充実した高校生活を送りました。部活で演奏会のポスターデザインを担当し、地域の方々に褒めて頂けた嬉しい経験がありました。自分の得意

寄稿 卒業生から

高校時代を振り返って

小松 洸哉（令和元年度卒業・白鷹町役場勤務）

私が荒砥高校を卒業した年は、新型コロナウイルスが流行する直前の時期だったと記憶しています。その後コロナウイルスの関係で様々な行事が中止になったり、行動が制限されたりと環境が一変し苦労された方も多いと思います。最近の感染者は相変わらず多い中、行動制限が解除され以前の生活に戻りつつありますが、油断せず引き続き手洗いうがいなどで感染予防の徹底に取り組んでいきたいと考えています。

い出は生徒会活動です。2年次から生徒会に加入し、3年次には生徒会長も務めさせていただきました。活動の中で学校行事を作り上げていたり、率先して地域の行事に参加して盛り上げたりと役員と協力して行った一つ一つの活動が、私の中でやってきてよかったと思えるものになっています。高校を卒業してすぐ地元で就職した私ですが、その活動で学んだことが今の生活にも活かしていると実感しています。



スポーツ祭
（ダンスを披露）



吹奏楽部 定期演奏会
長井市民文化会館

取り上げて頂き、有難いことに活動も県内外に徐々に浸透してきています。残り1年で最後の活動ですが、荒砥高校の卒業生として誇りを持って、これまで以上に私の大好きな山形を応援して元気づけられるように頑張ります。

の中で、小規模校ならではの活動で活躍されている荒砥高校には目を見張るものがあります。今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

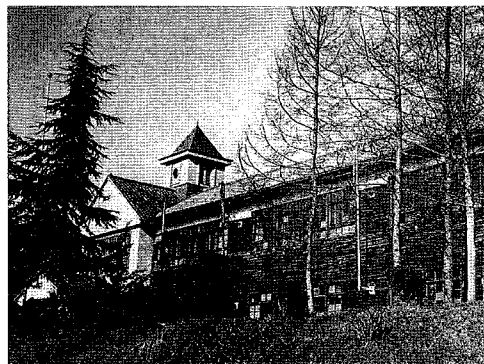
同窓会と私

石山 長吉（元職員）

私が荒砥高校に転勤したのが、昭和四十年でした。前任である事務の丸川範子さんから、「今度あなたが同窓会の事務局をやるように」と言われ、引き受けたのは良いものの、どうすればよいのか五里霧中でありました。

しばらく経つと荒砥高等学校創立三十周年記念事業が始まり、百万円の寄付の要請を受け、どうすればよいのか迷いました。当時、卒業生が六千人余りでしたが、名簿作成から始めなければならぬ事になり、戸惑いながら手探りでしなればなりませんでした。その時、初めてコンピューターが導入されました。週三回、勤務終わりに民間のコンピューター講習会を受講していたので、そんなにも大変な仕事とは思いませんでした。以外に簡単にできたと感じました。

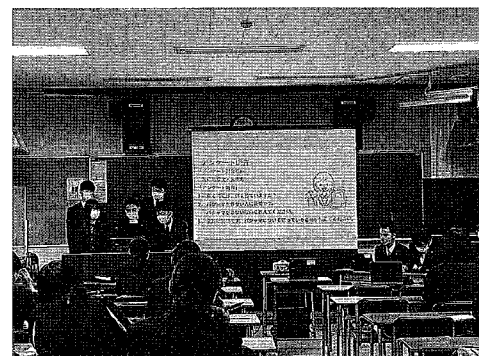
六千名の入力は大変でしたが、それでも寄付金用の名簿を作りあげ、夏休みに入り封書を三々四人の生徒にアルバイトさせながら理



懐かしい木造の旧校舎

科室で発送の準備したことは今でも記憶に残っています。寄付金も三百万円ほど集まり、要請を受けた金額以上を集められたことで安心しました。

この際、組織的になんとかしなければと思い、関東の卒業生の皆さんにも協力頂きたいと、関東支部の立上げを当時の金子昭一会長に相談しました。そして会長の同級生である新保興四雄さんに会長をお願いして関東支部を立ち上げました。東京に五、六回上京したことや設立総会には金子会長はじめ一〇名ほどの役員とタクシーを頼んで参加したことを思い出します。



探究課題を発表（2年次）

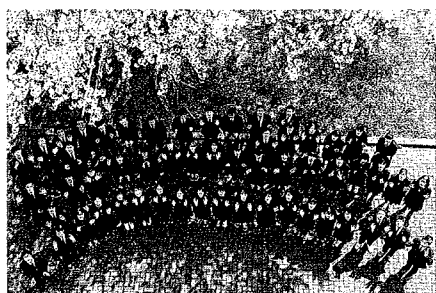
地域を学び、心を耕す

齋藤 芳昭（昭和五十二年三月卒業）

桜の季節を迎えると「赤坂の桜」を一目見ようと、自宅前の通称「墓地」（ぼつち）坂あたりがちよつとした賑わいを見せる。「置賜さくら回廊」の広告がYouTubeやLINEなどで広く紹介されるようになってから、町の名所「古典桜群」の魅力求めて、多くの県外ナンバーが目立つようになっています。

柔らかな陽光を浴びて瞬く間に咲き誇り、名残惜しそうに舞い散る姿を眺めていると幼い日を思い出し、しみじみとした思いとともに故郷の有難味に気づかされる。

町内の小学校を最後にリタイアして四年が過ぎた。教育とは地域の理解と支えなしには成り立たないものだと思いつつ、ふと荒高生による「たくまバンド」（金管バンド）指導のことを思い出した。創設以来、児童は荒砥高校吹奏楽部の指導によりめきめき上達し、今では地域の行事に招かれるまでの伝統あるバンドに成長した。感謝の一言



桜の木の下で（全校生）